

明成化・弘治朝宮廷の仙人図像の再構成

——劉俊の作品を中心に——

楊雅琲(東京大学)

本発表は、劉俊という明代前期の宮廷画家による仙人図に焦点を当て、その制作環境を探究し、成化朝(一四六五～一四八七)、弘治朝(一四八八～一五〇五)宮廷における文化の再編に伴う一環としてその意味と展開を解明するものである。

劉俊(生存年代約一四三〇～一四九〇前後)は『明実録』によると、宮廷絵画の第二盛期である成化朝の後期に活躍して高位を得て、画史では山水画と人物画を共に能くした画家である。現存する広義に認定される劉俊作には山水、人物、花鳥を題にする作品約二十三点がある。その中に仙人を主題とする作品が、造形上に顔輝派と類似し、描かれた仙人を全真教祖師として捉えられると指摘されている。ところが、劉俊作とされる複数の仙人図は、実に成化・弘治年間にわたって制作され、皇帝による文化政策の一部として目されると考えられ、本発表を持ってその側面の存在を提示したい。

文化の再編を強く意図した明の永楽帝(在位一四〇三～一四二四)は『永楽北蔵』『道蔵』など、複数の官刻仏教・道教經典の編纂作業を命じた。元代の伝統を継承しながら成立した官方の宗教図像は、皇帝や宮廷周辺の編者の意向を反映しつつ、明末まで制作され続けた。宗教図像のみならず、画院の第一盛期を実現した宣徳帝(在位一四二六～一四三五)の下で制作された『御製外戚事鑒』、第二盛期に当たる弘治帝の下で制作された『本草品彙精要』などといった挿絵入りの書物も、皇帝が主導した文化再編下の図像として位置付けられよう。

劉俊が仕えた成化帝は、神像と仙人像をよく描いたとされるが、自ら『御製釋氏源流』と『御製全真群仙集』という挿絵入りの仏・道教関連書物の編纂に携わった。二書の序文によると、その自ら図像と文字を監修し、世の中に広げさせようとする強い意向を読み取ることができる。劉俊作とされる「陳楠浮浪図」(相国寺蔵)「東方朔図」(個人蔵)は『御製全真群仙集』と元の永楽宮壁画などに描かれた道教図像に基づき、実際には全真教の創立者「王重陽」と直伝の弟子「馬丹陽」を描いたものと理解される。両者は全真祖師像と比定することが可能で、二作や『御製全真群仙集』の挿絵を含め、一群の劉俊様式に類似する仙人図像は、成化・弘治年間に複数の宮廷画家によって類似の様式で制作されたものと考えられる。従って、これらの図像は、成化帝や弘治帝が主導した図像再編を経て、信仰、演劇、絵画伝統など様々な宮廷文化に関わる要素が参入して構成された結果と考えられる。